

経営と健康

第1回

日本ロータリークラブ創立者 米山梅吉

講談師 一龍齋貞花

電材ご関係の方、ロータリークラブ会員の方が多いと思います。創立者米山梅吉が世に余り知られていないのが残念です。講談化し解りやすく、卓話で口演しています。

「米山さん、私ロータリークラブの会員です。明日定例会がありますから、ゲストとして出席なさいませんか」
「それは有難い。福島さんは非お願いします」

「お書きになりました新隠居論を拝読しました。書いておられますように、今アメリカでは隠居だけでなく、現役の人もいろいろ協力して、社会のために公益事業をしようという、ロータリークラブが各地で急速にできています。私もこのダラスのクラブに入会しています。」

「そうですね。かねてから私は、社会のために公益事業に尽くすことが大切と思っていました。そういうクラブのあることをそれとなく聞いていました。是非お願いします」

大正六年十月から、政府財政経済委員会の委員としてアメリカ訪問中の三井銀行常務取締役の米山梅吉は、かつてニューヨークに滞在していた時、ロックフェラー財団が、社会福祉活動に力を入れていることを知り、社会への奉仕に関心を持ち、働き盛りの四十八歳の時、「後進のためにも早く隠居し、それまで仕事に追われて出来なかつた社会のために成すべき公共事業がある。成功した総ての老人達は、是非有益な公共事業をしてほしい」という、新隠居論を発表。
約60社の役員全てを退任し、社会公

共事業に尽力している渋沢栄一にも、大きな影響を受け、早く一線から身を引き、社会のために尽くさなければいけないと考えておりました。

東京都町田市には、65歳以上の市民が福祉施設などでボランティアをする、商品券に交換できるポイント制があり、全国に広まるといいですね。

三井物産テキサス州ダラス支店長福島喜三次きさじのゲストとして、ロータリークラブの会合に初めて出席。米山にとつてこの出席が、社会奉仕活動への思いを一層強くしていったのでした。

米山梅吉は、慶応四年（一八六八）二月四日、大和国高取藩二万五千石植村家の家臣、和田家の三男として江戸の芝で生まれ、この年の九月から明治元年となります。ロータリー創始者ポール・ハリスも、一八六八年四月

十九日生まれ。二人は同じ年の生まれです。

五歳の時父が四十三歳の若さで急死、さらに廃藩置県のため江戸に住むことができなくなり、静岡の三島神社の宮司である母の実家に身を寄せます。尋常小学校五年生の時、土地の旧家米山家から、神童の誉れ高い梅吉を、「養子にほしい」と申し込まれます。

米山家の先祖は、今川の家来でしたが武士をやめ、名主を務めていたが、男の子に恵まれず娘春子と結婚させ、家を継がせようというのです。

家を継いでいる教師の兄が「名主から養子の話は願ってもないこと、梅吉いいな」

かくして米山家の養子となった梅吉は一心に勉強。弁が立つ上、文才もあり雑誌に投稿、度々採用され一番が夏

目金之助、後の漱石。一番が梅吉と、書くことに自信のある梅吉は、新聞記者に憧れ東京で勉強したいと希望するも許してもらえず、ならばと無断で家を飛び出し東京へ。中学の先輩のところにへ転がり込んだ。

米山家では、学校へ行ったきり帰ってこないの、「どうしたんだろう」と大騒ぎ。

「東京へ出たいと言っていた。賛成しなかったの、もしや…」

養子に入ったが、まだ籍が入れてなかった。その後、行方がわかり何とかおさまります。

そこで当時有名な漢学者で、のちに衆議院議員となる土井光華の書生となり、光華塾生として学ぶうち、世界に目を向け、

「アメリカの大学へ行って勉強したい」と、青山の東京英和学校、現在の青山学院に入学。アメリカ人のニコールバク先生に英会話を学びます。

そんな折、養父の米山藤三郎が、株式取引のため娘春子連れて東京へ

行った勉強したいです。帰ったら春子さんと結婚します。どうかアメリカへ行かせて下さい。まだ入籍が済んでいません。籍を入れて下さい」

二十歳の時正式に入籍しアメリカへ。

アメリカ留学八年間

日本人の経営するキリスト教会福音会へ。日本の青年を下宿させるだけでなく、就職の斡旋をしたり宗教的指導をする。ここで洗礼を受け、無料でなく賄料が一日25セント。援助を断っているの働かなければいけない。スクールボーイという制度があり、一週3ドルの皿洗いをしながら、オハイオ州ウエスレアン大学を中心に、その他の大学で政治学、法学を勉強。八年間の留学を終えて帰国し春子さんと結婚、梅吉二十九歳、春子二十三歳。当時の女性としては晩婚で、八年間も帰ってこないのですからさぞやきもきしたことだったでしょう。

梅吉は、留学中「提督ペルリ」を書き上げ、大手の出版社博文館から出版

することになり、当時アメリカ帰りのハイカラ三人男と呼ばれ、そのうちの一人望月小太郎から勝海舟を紹介してもらい、ペルリの本の題字を書いてもらいます。梅吉は、広い視野を持った海舟を敬愛しておりました。

新聞記者になったものの収入は少なく、土井光華塾の先輩で、井上馨の娘婿になっていた藤田四郎を頼ります。

井上馨は新政府の要職にあり、三井関連会社の経営に大きな発言力を持っていた井上は、娘婿に頼まれた梅吉を、三井物産社長益田孝と、三井銀行中上川彦次郎なかがわに紹介。最高の後ろ楯です。

三井銀行へ入行

「よし、一生懸命銀行の仕事に取組み、銀行というものを研究して専門家になろう」

三十歳という遅いスタートの上、文筆で世に出たいと思っていたからビジネスや計数に弱く、貸借対照表は解らない。そろばんも足し算、引き算しか出来ず、掛け算、割り算は鉛筆で筆算

するという有様。

しかし、優秀な男が腰を据えて励むんですから、事務的な仕事はたちまちマスター。八年間の留学経験から海外の知識、見識、優れた文章力、弁も立つ。

「流石、井上候の紹介だけのことはある」

どんどん頭角を現していき、入社九ヶ月で神戸支店次席に、給料は初任給の四倍というスピード出世。

ある時、出納係が店頭で五円札百枚渡すのを、十円札百枚渡してしまった。五百円のところ千円渡してしまった。家へ帰ってから気付いた客が、正直な客で五百円返しに来た。

すると米山は、

「それは受け取ってはいかん」

「エッ、どうしてですか」

「現金はその場限りだ。損害分は上司の私が責任をもって負担する」

金銭の授受を間違わないよう、部下に認識させるためだったので。

いよいよこれより銀行マンとして大活躍、社会奉仕の理念がロータリークラブ創立へと立ち上がるのでございませぬ。■